

## 江戸城・江戸関係絵図解題シリーズ 2

本記事は、科学研究費補助金・基盤（C）「近代国家模索の歴史的前提」（17K03094）および、東京大学史料編纂所画像センタープロジェクト「江戸城図・江戸図・交通図および関連史料の研究」の成果の一部である。

（両代表・杉本史子）

## 慶長江戸絵図

【サイズ】全体法量 440 × 862cm（折畳時 223 × 139 cm）

【紙質等】楮紙、手書彩色

【方位・縮尺記載】なし

【所蔵・伝来関係】東京大学史料編纂所 内務省引継地図 0277

旧番号 476-史-19（ラベル）、史-338（付箋）

【明治廿三年六月 大槻修二蔵本を写す】（図面右下隅墨書）、「小宮山氏収蔵図書」（図面左下隅印記）

江戸城下、内曲輪一円を描く。日比谷入江が描かれていることがこの図の大きな特色で、埋め立てによって入江が姿を消す前、江戸幕府開府以前の江戸の概況を描いている。測量・製図という過程をへて作られた地図ではなく、フリーハンドの描画で、地名の表記にも「平河と云フ所」「此辺北の内ト云」など、口伝的な部分があることから、不特定多数の人びとに供用する目的の図ではなく、心覚え、ないし、眼前の相手への説明用として描かれたものと思われる。しかし、はるか後の時代に推定して描いた図ではなく、実態からさほど隔たらない時期に書きとどめた、内容に一定の信頼がおける、現存最古の江戸図と目される地図である。

絵図の余白にはこの図の伝来について、弘化二年（一八四五）九月に、下

総国市川村松戸宿の葉商山下友右衛門の所蔵する図を借りて写した図であること、友右衛門所蔵図は友右衛門の祖父が写したもので、その原図は小田原の医師山谷という人が所持していたものであるという、大槻修二蔵本から転写したとみられる注記（墨書）がある。

【表紙】慶長江戸繪圖（手書題箋）

【内容年代】

本図の内容年代を慶長七年（一六〇二）ごろとする考証（朱筆）が地図左隅にある。直下に捺された長方形の印記「小宮山氏収蔵図書」から、その筆者が旧蔵者小宮山綏介（昌玄）であることが知られる。小宮山綏介は楓軒の孫、明治期には東京府地理志編纂総修をつとめ、東京帝国大学の史料編纂にもかかわった。考証は次のとおりである。

「申の年トハ慶長元年丙申ナルヘシ尾張トハ中将忠吉ナルカ然ラハ慶長五年十月以後ナルヘシ日比谷ハ慶長八年ノ頃埋立シナレハ此圖ハ乃チ七年ノ頃ノモノナルヘシ」

「申の年」は図上の注記「そうじの竹がき水のなかへ壺丈ほど出る水野殿御あつかひ也申の年出来る」など（図2）、「尾張」は御城地西のメ切門（紅葉山下）脇にある「尾張持分」（図1）にふれるものである。家康の四男忠吉は慶長五年一〇月に武蔵国忍城から清洲城に転封、尾張一国を与えられた。

内容年代について的小宮山の考証は、類例の「別本慶長江戸図」（都立中央図書館所蔵）の影写図を附図とする『東京市史稿』皇城篇第一の附図解説でも、ほぼ妥当であるとされており、以後、この比定が通用している。本図の入江西岸にある「僧正殿」（図2）は増上寺であろう。貝塚から日比谷に移った増上寺は、慶長三年に芝に移っているため、図の内容は慶長七年より早いかもしれないという指摘があるが（芳賀啓『古地図で読み解く 江戸東京地形の謎』二見書房、二〇一三）、『三縁山志』には、「方丈向 慶長十年御造営」とあり、移転はしたものの、関ヶ原の戦役などで寺院造営まで手が

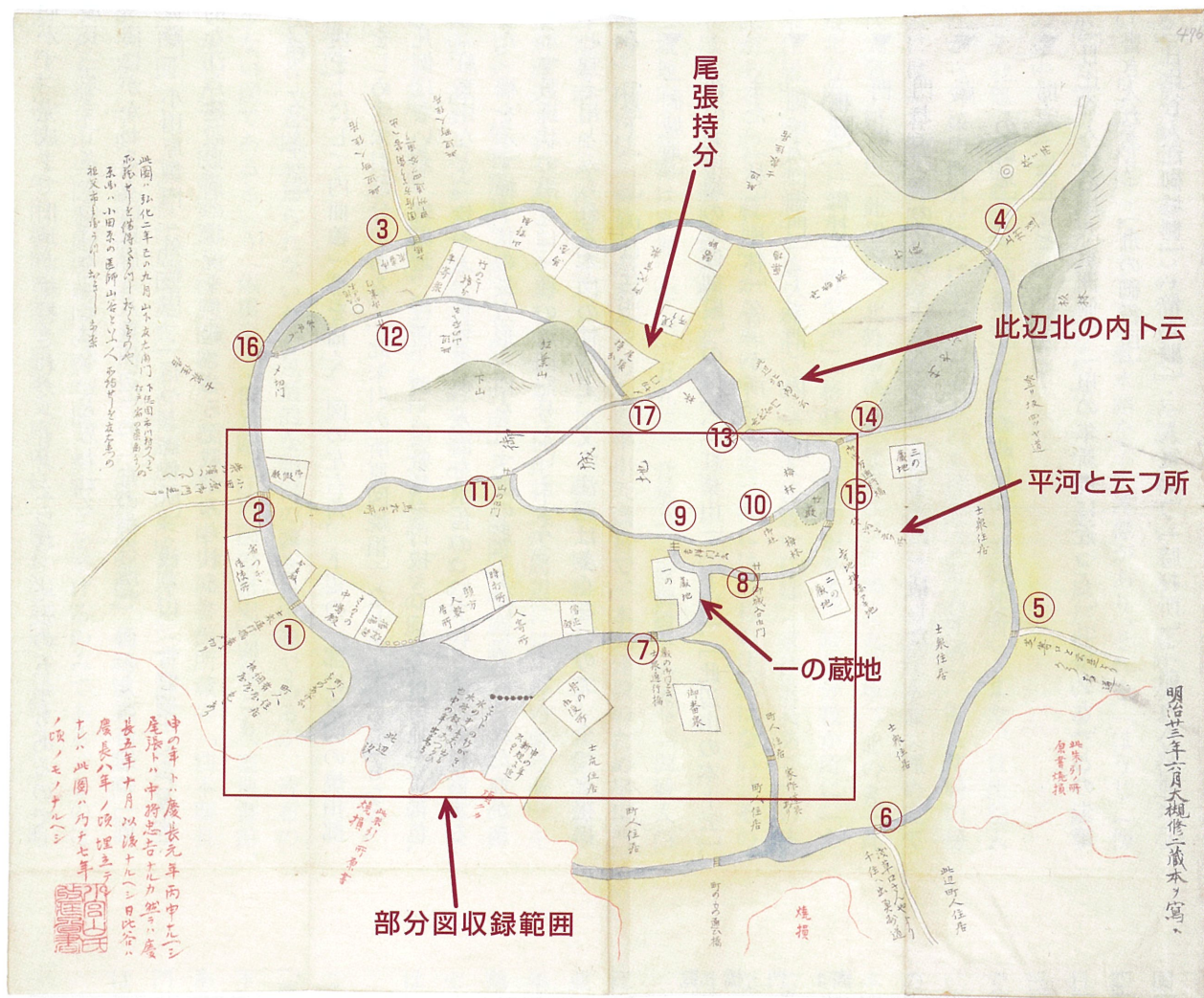


図1 慶長江戸絵図

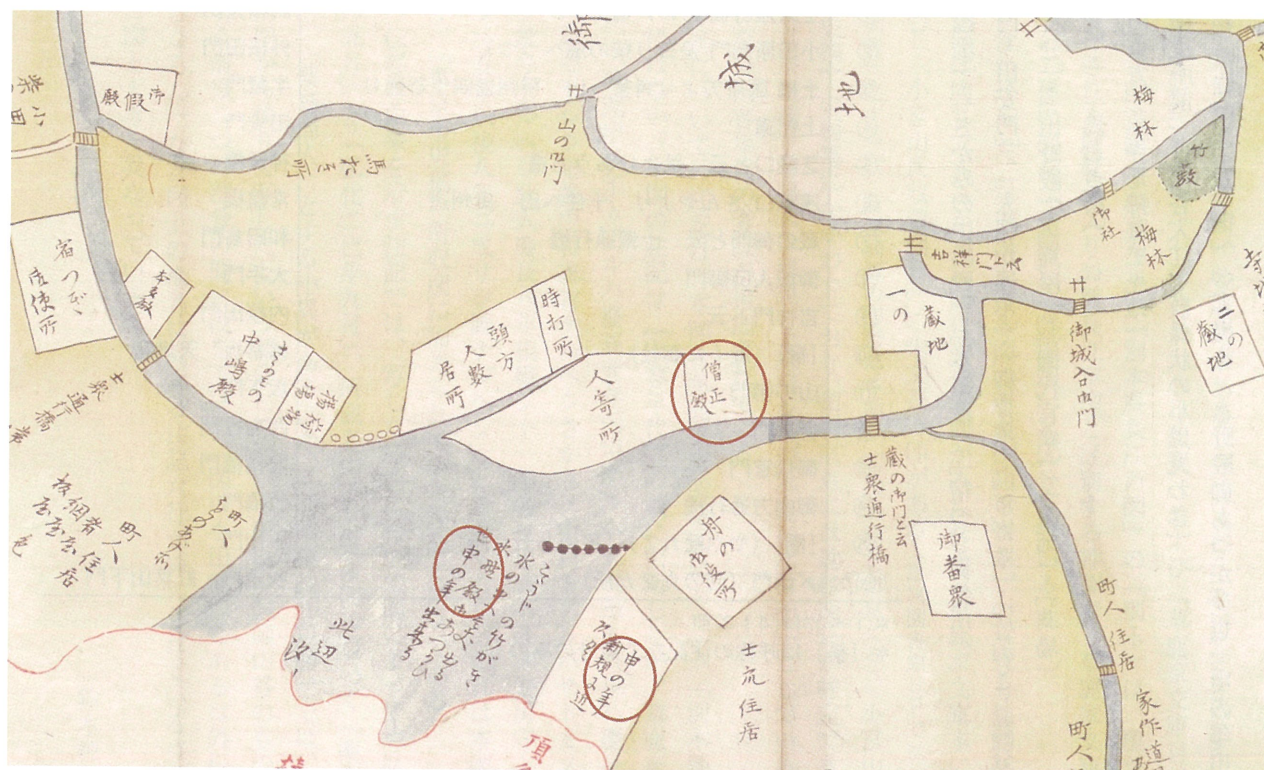


图2 上图赤桦部分扩大图



届かず、完成まで旧地が維持されたとも考えられ、尾張の五年もあるので、慶長三年までさかのぼることはないと思われる。

湊にかかわる入江東岸（八重洲辺）の「舟の御役所」、西の丸西南端の「御仮殿」、小田原御門（外桜田）、「宿つぎ御使所」、浅草口（常盤橋）など本格的な江戸建設以前の状況を想起させる記載がみられる。

#### 【内容・文字注記】

西を上にして内曲輪一帯を描く。図の左右角、下辺の一部に原図の焼損部分をしめす朱引部分がある。「此朱引の所原図焼損」などの朱書をともなう。凡例はないが、御城地、役所、蔵、屋敷地を白抜きとして市街地を黄褐色、山（紅葉山など）、竹やぶ、杉林を緑、水面を水色の、いずれも淡彩で彩色する。また、橋を示す梯子状の長方形、門を示す柵の形、入江に設置された竹がきを示す数珠状の黒点は一種の地図記号といえよう。

心覚え用とみられる本図の性格上、文字注記は多くないので、全てを掲出する。（以下「」内は注記）

#### ▼ 「御城地」

西の丸南端の「仮御殿」のほか、「紅葉山」・「下山」、「此辺山の本ト云」、また、「林」「梅林」各一か所。

#### ▼ 「御城入口御門」（大手門）内

「梅林」・「御社」

#### ▼ 門・橋

門および橋の名称、注記などは（表1）に一括した。

#### ▼ 蔵

「一の蔵地」・「二の蔵地」・「三の蔵地」

#### ▼ 邸宅・施設など

「日比谷入江沿岸八重洲側」「申の年新規に近づく」（「頂クカ」との朱筆書き入れあり）・「舟の御役所」

「日比谷入江御城側」「僧正殿」・「人寄所」・「時打所」・「頭方人数居所」・

表1 門・橋一覧

|    | 絵図上の記載                | 指示対象      |
|----|-----------------------|-----------|
| ①  | 士衆通行橋 常にヰ切            | 馬場先門      |
| ②  | 小田原御門 是ヨリ柴の濱へつつく      | 外桜田門      |
| ③  | 土橋 国府方より角筈へ出 甲州道四ツ谷通り | 半蔵門       |
| ④  | 上州道                   | 田安門       |
| ⑤  | 芝崎口と云 是よりあうち道         | 神田橋       |
| ⑥  | 浅草口 さんやより 千住へ出 奥州道    | 常盤橋       |
| ⑦  | 蔵の御門と云 士衆通行橋          | 和田倉門      |
| ⑧  | 御城入口御門                | 大手門       |
| ⑨  | 吉祥門ト云                 | 内桜田門      |
| ⑩  | 〔橋〕（近くに御社）            | 梅林坂 天満宮   |
| ⑪  | 山の御門                  | 坂下門       |
| ⑫  | 御裏門                   | 西丸裡門      |
| ⑬  | 御代官門                  | 北拮橋門      |
| ⑭  | 御内方通行橋                | 竹橋門       |
| ⑮  | 〔橋〕（やや離れて）「平河と云う所」    | 平川門       |
| ⑯⑰ | ヰ切門（西の丸2か所）           | 吹上門・紅葉山下門 |

\* ①～⑰は図1参照

\* 〔橋〕は呼称の注記なく記号のみのもの

「荷物揚場」・「さかみの中嶋殿」・「本多殿」・「宿つぎ御使所」  
「半蔵門」・「田安門」・「大槐か連木」・「御番衆」・「年寄衆」・「竹のこし持分」・  
「尾張持分」・「山野殿」・「馬屋」・「御代官衆」・「医師」・「薬場」  
「西の丸下」・「馬おき所」  
「平川門東方」・「寺地拂跡アキ地」  
「舟の御役所前、日比谷入江、数珠状の黒丸わき」  
「そうじの竹がき水の中へ一丈出る 水野殿御あつかひ也 申の年出来

る」(各文献で「そうじの竹がき」と読まれているが、意味がよくわからない。「舟の御役所」などへの可航水路を示す濤標があり、それを「ほうじ(傍示)の竹がき」としたのではないか。「ほ」(本)と形が似ているため、伝写の途中で「そ」になったのではないか)。

その他、小田原御門の東には伝馬役の「宿つぎ御使所」、また、日比谷入江から外桜田門外にかけて、「町人ものあげ所」「町人住居」、町人住居の傍らには「肴屋 網屋 板屋 色々あり」の注記、日比谷入江水面(埋め立て後大名小路)に「此辺汐」、北外縁部に「登坂四ツや道」(九段坂)、北の丸「此辺北の内ト云」、また、「竹やぶ」「杉林」の表示がある。町部分数か所に「土衆住居」「町人住居」、道三堀沿いの「町人住居」には「家作道具あり」の注記がある。「一ノ蔵地」から東に向かう道三堀には名称の注記はない。その中ほどにかかる橋は銭瓶橋であろう。

城地内の建物は文禄二年(一五九三) 営築の「仮御殿」のみ、「御城入口御門」内には「御社」がある。のちの平川天満宮で、本丸建設のため平川門外に遷座、さらに現在地へと移る。「一ノ蔵地」は和田倉である。和田倉の称が海辺であったことを示している。日比谷入江周辺には「舟の御役所」をはじめ、「荷物揚場」「町人ものあげ所」など湊関連の施設があり、「舟の御役所」前の「竹がき」は舟の進入路を指示するための目印(傍示)と思われる。「肴屋 網屋 板屋」と挙げられる店舗も汐入りの地を思わせる。

# 【類例】

著者・表題が知られないため包括的な類例の調査は困難であるが、流布の少ない図であるという(飯田竜一・俵元昭『江戸図の歴史』別冊とも、築地書館、一九八八)。同書別冊「江戸図総覧」は、都立中央図書館所蔵の「別本慶長江戸図」と、『古板江戸図集成』(古板江戸図集成刊行会『古板江戸図集成』第一巻、中央公論美術出版、二〇〇〇)、『東京市史稿』皇城篇第一附図(いずれも都立中央図書館所蔵図の影写図・無彩)を挙げるのみである。このほか、日本福祉大学附属図書館草鹿家文庫中に、「慶長江戸図」二種として、「略

図」(本図類例)、「詳細図」の所蔵がある(<http://library2n-fukushi.ac.jp/kusaka/index.htm>〈二〇一七年八月一八日閲覧〉)および『草鹿家文庫目録』日本福祉大学図書館、一九九三)。「別本慶長江戸図」の「別本」は、慶長一三年ごろとされる屋敷名入りの慶長江戸図と区別する呼称で、草鹿家文庫本ではこれら二種の図を「略図」・「詳細図」と区分している。

本図と合わせると、三点の手書き図の所在が知られる。いずれも地図部分の内容はほぼ同じであるが、注記にやや異同がみられる。草鹿家文庫本には本図と同じ「小宮山氏収蔵図書」の朱文長方印がある(附属図書館HPでは「小宮山所蔵図書」とするが、目録図版の印影は本図の「収」と同じに見える)。小宮山は『東京市史稿』の編纂にかかわっており、類例三点には近縁関係が推定できる。なお、『東京市史稿』所収図は解説で、原図を「別本慶長江戸図」としているが、同図にはない内容年代の考証が追加されている。

時代考証についての注記は、本図と草鹿家文庫所蔵図にあつて、「別本慶長江戸図」にはない。本図の注記は【内容年代】の項に引用したが、草鹿家所蔵図では、「此圖申ノ年トアルハ慶長元年丙申ナルヘシ尾張トアルハ慶長五年清州ニ封セラレシ尾張中将忠吉ナルヘシさかみノ中島トアルハサトミノ梅鶴ノ欠ケ訛リナルヘシ此人慶長八年相續シ十一年名ヲ忠義ト改メ安房守ト稱セリサラハ五年以後八年ニ成リシ圖ナルヘシ」となっており、これは本図とは異なり、『東京市史稿』所収図に加えられている注記と同文である。

また、伝写の由来を示す注記では、写した時期について図によって「弘化二年巳の九月」と「弘化二巳年九月」、所蔵者山下友右衛門について「薬商」「薬商人」「薬種商人」とする小異があるほか、「別本慶長江戸図」では、山下友右衛門から借りて写したという部分と原図が小田原の医師山谷のものであるという前後二つの部分の間に段を下げて「図中小田原口とあるは外桜田門のことならん」など図上の地名に関する注記六行が挿入されている点、ほかの二図と大きく異なっている。

(鈴木純子)